

| | |
|------------------|---|
| Title | ディルタイとラザルス |
| Sub Title | Dilthey und Lazarus |
| Author | Lessing, Hans-Urlich(Funayama, Toshiaki) 舟山, 俊明 |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 1997 |
| Jtitle | 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.46 (1997.), p.23- 38 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000046-0023 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ディルタイとラザルス

—Dilthey und Lazarus—

著 H.-U. レッシング*

Hans-Urlich Lessing

訳 舟山俊明**

Toshiaki Funayama

【訳者解題】

本稿は、H.-U. Lessing: Dilthey und Lazarus, in: Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaften, Bd. 3, Göttingen 1985, S. 57-88. を訳出したものである。著者 Lessing には、ディルタイ哲学の形成史研究に関して、本稿の他に Dilthey und Helmholz —Aspekte einer Wirkungsgeschichte—, in: Deutsche Zeitschrift für Philosophie 43 Berlin, 1995 S. 819-833. (拙訳「ディルタイとヘルムホルツ—影響史の諸相—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第43号, 1996, PP. 19-29 所収) や Dilthey und Johannes Müller, in: M. Hagner/B. Warig-Schmidt (Hg.), Johannes Müller und die Philosophie, Berlin 1992, S. 229-254. (拙訳「ディルタイとヨハネス・ミュラー」『ディルタイ研究』第6号, 日本ディルタイ協会, 1993, PP. 17-32. 所収) などがある。これらはいずれも彼の主著である Die Idee einer Kritik der historischen Vernunft, Wilhelm Diltheys erkenntnistheoretisch-logisch-methodologische Grundlegung der Geisteswissenschaften, Freiburg/München 1984 の内容を拡充した特殊研究である。

本論文で主題として取り上げられている「民族心理学 Völkerpsychologie」なる概念は、ナチズムを経験した今日の目から見れば、かなり危うい構想を含んでいると思われるが、しかしながらヘーゲル哲学崩壊後の知的空隙を埋めることを課題としていた19世紀後半の知識人にとっては、ヘーゲル哲学に代わるオルタナティブのひとつとして極めて魅惑的な試行だと考えられたので

あった。というのも「民族心理学」は、心理学という言葉から想像されるものを越えて、今日の言葉をもってすれば、文化人類学や民族学、そして社会学や歴史諸科学を含む総合的な人間科学として構想されていたからである。たとえば社会学者として知られるジンメルは、1880年代から1890年代にかけて心理学的手法を駆使した様々な作品を書いているが、そのさい手本にした心理学こそラザルスたちの創始した「民族心理学」であった(詳しくは疋茂『ジンメルにおける人間の科学』木鐸社1995を参照)。ちなみに、ラザルスとならんで、こうした構想の創設者のひとりであるシュタイントールは、比較言語学者として、フンボルト(W. Humboldt)の言語学著作集(Die Sprachphilosophischen Werke Wilhelm's von Humboldt, herg. und erklärt von H. Steintal, Berlin 1884)の編纂および解説者としても知られている。

周知のように、19世紀中葉から後半にかけて隆盛を極めてきた実証主義的な自然諸科学を前にして、いかにして経験科学としての、しかも自然科学から独立し自然科学に比肩しうる精神科学が可能であるかという問題、すなわち精神科学の基礎付けをめぐる問題はこの時代の哲学者や思想家に共有された事柄であった。その上にヘーゲル哲学体系を筆頭にあらゆる形而上学体系に対して疑義が提起され、その結果、知識の断片化や存在知と当為知との分断状況が惹きおこされたのであったが、それにもかかわらず、いやそれだからこそ知の全体性を確保し実践への担保を与えるような知識を求めるといった切実なる願望も依然にまして強く存在するところとなったのである。こうした知をめぐる危機状況—それはまた時代そのものの危機状況でもあったのだが—の克服をめぐ

* ルール大学(ボーフム)私講師(哲学)

** 慶應義塾大学文学部教授(教育哲学)

る知的格闘の様相を明らかにすることが本論の骨子である。

こうした点でもディルタイとラザルスとの関係は、個人的な影響関係を越えて、思想上の確執を引き起こさないわけはなかったものであり、ラザルスの「民族心理学」に対するディルタイの対応にはアンヴィバレントなところがあるが、この姿勢こそ19世紀後半に生きた知識人の特徴を鮮明にしているものはないといえるであろう。

(なお、訳文中の [] 内は訳者の補足である)

[本文]

ディルタイの哲学的活動の中心には、《歴史的理性批判 Kritik der historischen Vernunft》という問題を解決する試みが位置している。精神科学つまり社会的・歴史的現実についての科学に認識論的・論理的・方法的な基礎を与えようとするこの計画は、ディルタイの体系的な主著である『精神科学序説 Einleitung in die Geisteswissenschaften』¹⁾によって実現されるはずであった。

ディルタイによるこの雄大な企画は、当初は二巻の分量で、その後三巻本として構想され、その第一(唯一の)巻が今から100年ほど前の1883年初旬に公刊されたわけであるが、これは体系的上の観点からばかりか時期的な観点からしてもディルタイの学術的なライフワークの中核を形成しているのである。

『序説』第一巻の刊行には、他の出版や出版計画によって度々の中断をはさみながら、完成までにはほぼ六年にわたる作業時間が費やされた²⁾。くわえて著作を完成させるにあたっての最後のひと押しを与えたものが、一急遽、候補者として指名された一ベルリンの哲学正教授職(Ordinariat)が今まさに空席であるという事実であったことは疑う余地がない。というのも、ディルタイの旧師であったトレンドレンブルク(Friedrich Adolf Trendelenburg)が1872年までその地位を占めていた哲学講座のその当時の担当者であったロッツェ(Rudolf Hermann Lotze)が、ベルリンでの一年に満たない教授活動の後、1881年7月1日に突如として不帰の客となったからであった³⁾。

なるほど『序説』第一巻の直接的な完成は、明らかに、僅かの期間の間にディルタイによって達成されたわけであるが、一この計画の大変に込み入った、復元するに困難さをともなう成立過程に目をやると一まったくのところ『序説』の二十年以上にわたる前史について語りうる

のである。精神科学の基礎付けへの体系的な取り組みを初めて計画し、それに着手した時期は1860年頃であり、それゆえディルタイのベルリンでの勉強時期にまで逆上れる。60年代初期のこの計画と挑戦から、1875年の重要な論文「人間、社会、国家についての諸学問の歴史研究 Über das Studium der Geschichte der Wissenschaften vom Menschen, der Gesellschaft, und dem Staat (V, 31-73)」を経て『序説』にまでは、一直線につながっている⁴⁾。

というわけでディルタイの研究計画はもともと、19世紀ドイツにおける精神科学と精神科学の哲学(ないしは時代に相応して言えば、学理論 Wissenschaftstheorie)にとって世紀後半の数年間の最も重要な時期のなかで芽生えたのであった。一手短にいうと一この時期の特徴を刻印づけたのは基礎の不確定性、より先鋭に言えば精神科学的な研究の基礎付け上の危機である。すなわち、精神科学の拘束力ある論理を手にし得ない状況にあったわけである。世紀前半に《歴史学派 Historische Schule》によって、ヘーゲルやその一派との陰影に富んだ確執のなかで確立され確固なものとされた精神科学が、その方法基準に関して、1850年以降、より一層の基礎付けを迫られる状態に陥ったのである。実証主義的・経験主義的な挑発、とりわけコントやバックルなかでもミルの名と結び付けられたその挑発を前にして、認識論的に基礎づけられた論理や方法論によって一つに纏められたのではなく、大きな一塊のような歴史学派の人々が遂行するそのつどの研究成果によって構成されるところの精神科学は守勢を余儀なくさせられた⁵⁾。精神科学者や哲学者のうち、歴史学派から多大の影響を受けた若き世代の他の者たちと同様に、ディルタイの初期の体系的な考察もまた、伝統的な精神科学に対して実証主義的・経験主義的な挑発によって惹起された基礎不確定性を生産的に克服しようとする多様な試行錯誤の文脈に位置している。実証主義的科学(szientische)プログラムとの青年ディルタイの批判的な対決の狼煙は、まずはバックル(Buckle)の『英国文明史 History of Civilisation in England』—ルーゲ(Arnold Ruge)による翻訳が1860/61に刊行された—に対して上がったのであった。

そこでの批判から見えてくるのは、経験主義的な感覚主義わけでもミルの『論理学 Logik』において影響豊かに展開された基礎付けに対して、自然科学の方法理想からは独立した精神科学的な研究の哲学的に受け入れ可能な基礎付けを、つまりは歴史学派的方法的基準を確実なものとする基礎付けを対置させようとする意図である。

実証主義的・経験主義的な認識論や学理論との幾年にも及ぶ批判的なこの議論の、そしてほぼ60年代中頃以来生じた伝統的・認識論的モデルとりわけカント的な先験哲学との体系的な対決の過程で、ディルタイの場合、徐々に（およそ60年代末以降）彼固有の学問的哲学的立場の輪郭が形成されていったのである。その立場を基盤にして（ほぼ1871年以来）、精神科学の基礎に関しての、壮大な構想をもった歴史的・体系的な研究が時の経過とともにより具体的な形態を獲得しつつ、精神的に進められるところとなった。

実証主義・経験主義としてカント的先験哲学とのこの対決と並んで青年ディルタイ—彼の哲学上の始まりは、本来は歴史学派の一人でありアリストテレス主義者で反ヘーゲル主義者であるトレンデレンブルクから、並びにシュライエルマッハーやロマン主義哲学の研究から影響を受けていたのだが—にとって、ラザルス (Moritz Lazarus, 1824-1903) と民族心理学という彼によって手を着けられた新たな学問は特別な影響を及ぼした。この緊張を孕んだ、しかし同時に両者にとって実り豊かな関係を顧慮することなしには、ディルタイの全作品を解明するために極めて有益な《ディルタイ青年史 Jugendgeschichte Diltheys》の叙述は少なくとも未完に留まるのである。

ディルタイは、その知的な発展にとって特に重要な段階である1855年から1864まで、ラザルスと親密な交際をしていたし、ラザルスの諸著作を通じて、いやおそらくそれ以上に規則的かつ集中的に行われた会話（わけでも1860年まで）を介して本質的な衝撃を経験した。ラザルスとの密接な交友関係そしてラザルスの協同研究者で（後の）娘婿であるシュタインタール (Heymann Steinthal, 1823-1899)—彼とともにラザルスは1859年から1890年まで、20巻もの影響豊かな『民族心理学言語学雑誌 Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft』の編集に携わった—とのあまり頻繁でもなく感情的にやや冷めた接触は、青年ディルタイには、多様な学問的刺激のうちとりわけ評価すべきひとつの源を意味している。

ラザルスが基礎を与え、シュタインタールとの共同作業のなかで改造され、他の一連の精神科学者や哲学者たち—コーエン (Hermann Cohen) とジンメル (Georg Simmel) の名のみを挙げるが—に多大な影響を及ぼした民族心理学に、ディルタイは多大の関心を寄せたが、しかしまた [それは] 直ちに彼の抵抗を目覚めさせ、彼をして民族心理学のプログラムに対する根拠ある別の選

択肢を構想せざるをえないよう強いたのであった。

ディルタイは民族心理学の構想とのその対決を公刊することなく、あるいは関連して述べられたいかなる体系的批判も持ち続けることはなかった。それにもかかわらず、新たな学問を [創出したい] というラザルスのプログラムについての批判的な論議が、初期ディルタイのほとんど全ての文献をいわば通奏低音的に貫いている。民族心理学とのこの生産的な対決—これが私のテーゼであるが—は、実証主義的な科学哲学や経験主義的、カント的な認識論との同様な対決と並んで、ディルタイ自身の精神科学の哲学の構築にとって決定的な意義をもっているのであるが、しばしば見過ごされあるいは過小評価されてきたのである⁶⁾。

以下において為そうとする試みは、ディルタイの初期の作品にとって意義あるこうしたラザルスとの関係および彼の民族心理学との関係の二、三の側面を素描することである。

I

まず始めにディルタイとラザルスとの個人的な関係についてその概略を述べよう。そのための最も重要な資料は二つの書簡集、『若きディルタイ Der junge Dilthey』⁷⁾ と『ショルツ夫妻宛書簡集 Briefe Wilhelm Dilthey an Bernhard und Luise Scholz 1859-1864』⁸⁾ の中に含まれている。ディルタイとラザルスとの間には、時には明らかにきわめて頻繁に書簡の交換がなされたと思われるが、今日残されているものは僅かであり、公刊もされていない。今日まで管見できる限りで言えば、(ラザルスのベルン移住以来取り交わされた) 書簡による両者の掛け値なしに豊かな思想の交換の跡からは、二人の哲学者の間の関係や彼らによってなされた論議を明瞭に知りえる新たなものはほとんど期待できない。ラザルスとその一派とが、ディルタイのその後の形成史を顧みた時、たいして役割を果たしていないのと同様に、ラザルスのある部分では包括的である思い出の記⁹⁾ のなかでのディルタイへの言及も僅かである。60年代中頃より、ラザルスとディルタイの間には、両者の疎隔を間接的に示す徴候が存在したが、数年後には明らかに両者の関係は完全な破綻へと突き進んだのであった。

ディルタイの手紙から推測されるように、彼はほぼ10歳年長のラザルスと—おそらく1854年末から55年初頭に¹⁰⁾—友人のヴェーレンペニヒ (Wilhelm Wehrenpennig) を介して知り合いになった。ディルタイが記すように、ヴェーレンペニヒはラザルスの「家族同然にも

ひとしい友人」であった¹¹⁾。

ラザルスはこの時分ベルリンにおいて経済的に自立した民間学者として生活し、自覚的に同化したユダヤ人のあるタイプを代表していた¹²⁾。

ラザルス¹³⁾の出目はポーランドの小都市フィレーネ (Filehne) の正統派ユダヤ商人の家系であった。彼は最初、伝統的な聖職者教育を受け、ヘブライ語・タルムードの勉強に勤しみ、ユダヤの哲学的・神学的伝統に専念したのであった。初等学校を終えた後、ラザルスはブラウンシュヴァイク (Braunschweig) のギムナジウムにおいて、節制に節制を重ね、また身を惜しみつつラビになるための教育への準備の後に、ベルリン大学でのさらなる研鑽のため 1846 年にブラウンシュヴァイクを後にしたのであった。とはいっても一年後にはもう彼は着手していた道を中断し、一慣習的なユダヤ教の形態への疑義によって惹起された人格上の危機の帰結として一神学研究を諦めて哲学と心理学に専心するのであった。これらの学問は彼にとって、ブラウンシュヴァイクにおいて既に、ヘルバルト (Herbart, J. F.) の私的な弟子であったグリーベンカール (Friedrich Konrad Griepenkerl) を介して馴染みになっていたものであった。

ヘルバルトの心理学や哲学への知淑は、ラザルスのその後の成長を長きにわたって規定した。ラザルス自身、自らを称して正統派ヘルバルト主義者ではないと言おうとも、彼は明らかに広義のヘルバルト学派の一員と見做されるであろう。

ベルリン大学においてラザルスはとりわけベネケ (Friedrich Eduard Beneke) の講義を聴講し、それと並んでまたトレンデレンブルク (Trendelenburg)、ヘーゲル学派のガブラー (Gabler) やミシュレ (Michelet, K. L.) らの講義をも聴講している。しかしその評価においては、彼はヘーゲル哲学に対しては非常に批判的であった。彼の研究の中核にはヘルバルトの哲学と心理学の集中的な勉強が存在していたのである。

1849 年 11 月に彼は、経済的な理由から、ハレにおいて、「美的教育について De educatione aethetica」という論文によって哲学博士の学位を取得した。学位取得直後の結婚、それはラザルスに経済的な心配なしに自己の哲学的・心理学的な興味にそって生きて行くことを可能にしたのだが、その後には彼は [正式な] 哲学教授職をえる見込みのないユダヤ人としてベルリンを後にしたのである。

ラザルスが 1850 年に公刊した小著は『ドイツにおけるプロイセンの倫理的正当化 Die sittliche Berechtigung

Preusens in Deutschland』とのタイトルがついていたが、引き続いて彼は種々の新聞や雑誌に多くの批評¹⁴⁾と並んで心理学や美学のエッセイを書いた。その後 1855 年には彼の心理学上の主著の第一巻『精神生活、その現れと法則についてのモノグラフ Das Leben der Seele in Monographie über seine Erscheinungen und Gesetze』が出版され、1857 年には第二巻が続いて刊行された。

この著作はそれなりの成功を収め¹⁵⁾、ディルタイによってもまた一彼のテキストのなかの様々な参照が証左すように一注意深く研究され解き明かされた (参照 J, 28)。

そうこうする間にラザルスの家には活気ある討論サークルが形成され、そこには才能ある若手の哲学者や精神科学者らが仲間に加わり、ディルタイもまた活動的な構成員のひとりとなっていた。さらにはディルタイはラザルスとともに長きにわたってヘブライ語の勉強を行っていたのであった (参照 J, 28 と 31)。

ディルタイは 1858 年の秋に両親に宛て新たな計画について一通の手紙を認めているが、その計画の進展にはラザルスや彼の一派とのほとんど連口にわたる交際が、内容的に密接にかかわっていた。「米年始めには彼 (ラザルス) はシュタインタールと協同で、ある雑誌—民族心理学と言語哲学—を編集します」¹⁶⁾、続けてディルタイは「そしてラザルスは多くの新たなイデーに鼓舞されていますが、その新たなイデーは歴史的な事象を考察する私自身の遣り方と全くもって触れ合うものです。彼と私が共有する確信は、歴史の運動というものは諸々の法則に支配されており、それは自然の諸法則と同じく認識しえるものだということです。というわけで、私たちはしばしばそれぞれ別々ではありますが、直ぐに極めて活々とした会話が成り立つのです」(J, 49 以下) と記している。

弟のカール宛の手紙 (1858 年初頭) の中で、ディルタイもまた同様に新たな企画に賛意を示しつつ「私はラザルスから多くを得ました。彼は、自ら民族心理学と名付ける学問でもって私の考えと非常に類似した道を歩んでおり、私はそれについて頻繁に彼とやり合っています。年が改まるとともに彼は、シュタインタールと一緒に『民族心理学と言語哲学』という雑誌を編集しそうです。ここから何が生まれるのか、私は熟視しています」と言っている。もっともディルタイはここで、ラザルスによって展開された構想に対する、ある確かな疎隔—この構想に対して、ディルタイは原理的に明白に対立して

いるが一を認めさせる示唆を付けくわえて、「ラザルスが《民族心理学》というこの研究の名称と限界の正当性に少なくとも疑いを抱くようになり、その結果この概念に嫌悪を感じさせるまでにしたい」(J, 51)と言う。

とりわけ指導的概念である《民族心理学》、そしてこの概念に暗に含まれるものから惹き起こされるラザルスとのこの疎隔をディルタイは、ラザルスとシュタイントールの編集した Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft の公刊後に妹に宛て認めた手紙(1859年春)のなかで表明している。そのなかで彼は、ラザルスとシュタイントールとの共同によって作成されたプログラムの巻頭序言を掲げるこの巻について小さな書評を「書くことを」妹に約束している。そこでは「丁度いまラザルスとシュタイントールの民族心理学・言語学雑誌の第一巻が出版されました。私の手持ちのものを直ぐには送ることができません、というのちよとした紹介記事を「書くために」それが入り用だからです。ヴェーレンベニヒとシュタイントールとが自制しなかったあらゆる閥支配の始まり、仲間同士の褒め合いは私にはあまりにもひどく不快ですので、長大な書評は書きません。それだけでなく問題の捕らえ方、それが肝要なのですが、それに対して多様な学問的疑念を抱いています。しかし文献学者や歴史家が、とりわけ文献学者にあてはまるのですが、概念による思考に通じることができず、あまりにも容易に否定的になって、それどころか正しく思える意図全体に対して反対の声をあげるのを危惧するからである。そういうわけで事柄と真当に取り組んだ上での賛同が公衆のあちこちに聞かれることがまさに必要なことなのです」(J, 69)。

ディルタイの予告した書評は1860年2月に作成され、『月刊ヴェスターマン画報 Westermanns Monatsheften』紙上で公にされるはずであった。この短評と、それに関してラザルスとの間に遂行された討論についてディルタイは父親宛の書簡(1860年2月中旬)のなかで次のように記している。「ここ数日の間ラザルスの雑誌についての紹介文を書いています。それをあなたは Monatsheft 紙上で一読されるでしょう。そこでは私は物事のちょっと変わった私自身の見方を背後に引っ込めておいたのですが、私の友人とラザルスとははまったくはっきりと解るようそこで暗に示しておいたのです。ところが彼は大変に喜んでそれ【この紹介文】を取り上げてくれました。それについて私たちが交わした長い会話から分かったことは、彼が新たな学問の創造という自尊心から今ではかなり遠ざかってしまったということ、

そして彼の企図が實際為しえたであろうことについて今となって彼が大変に控えめに考えているということです。実際のところ悲しむべきは、勿論大抵は外的な事情によって阻まれてはいるものの、彼の思想にはほぼこの一年来一歩の進歩も見られないのです・・・もしもラザルスがその天与の才にくわえて集中力ある意志を持っていたならば、彼はいかなることを為しえたでしょうか」⁷⁾。

相反する業績評価によって示されるような人間関係のある種の不利益は、『精神生活 Leben der Seele』の業績をもとにして「ラザルスに対して」提示されたベルン大学の招聴教授職を喜んで受け入れようとするラザルスの内々の申し出に影響を与えた。

ディルタイはこの「ベルン行きの」計画を鋭く批判¹⁸⁾したが、しばらくたってからその批判を自制したのである(J, 102)。

ラザルスとの一ほとんど一毎日の接触が破綻の際に來ていることについてディルタイは両親に宛て以下のように書いている(1860年の復活祭に)。「彼【ラザルス】のいないことを考えるは私にとってどれほど辛いことになるのでしょうか。他のいかなる人との交際もこんなに深く素晴らしい心地よさの変わりにはなりえません」と。そしてそれに驚くべき確信を付けくわえて、「私が少しでも知的になりえたとすれば、それは多くの部分で彼のおかげなのです」(J, 112)と言っている。

ラザルスがベルンへと移り住んだ後、二人の友人間の思想の交換は手紙で続けられた。ディルタイは興味を持って、ラザルスのさらなる学問的な生産を追いかけたのである。それはベルン大学の教授活動¹⁹⁾の数年間はほとんど専ら彼の民族心理学のプログラムの遂行に捧げられたのであったが。

この問題点と並んでラザルスが取り組んだのは、学問論 Wissenschaftslehre の諸問題であった。このことはショルツ(Bernhard Scholz)宛のディルタイの手紙(1860年10月末日)より推測されうる。このなかでディルタイはラザルスの目論みについて、学問論についての講義を行っていると報告し、それに注目している。「事実ここで彼【ラザルス】は私の考えと道を同じくしていますが、私でさえこの五年を経過してやっとその道に敢えて歩み入ろうとしたのです。要するに彼は厳密的で歴史的な学問の諸方法と諸前提を研究したいのです。結局のところ彼はまさにロッツェ(Lotze)に縋っているのです(...)。しかし彼が最初やってみようとしたことを一そこでは彼は私の研究と交差するのですが一、それを私

は予想できませんでした。彼がそれについていかなる知識も持ち合わせていなかったのは確かです。それにもかかわらず、この一連の考えのなかに真なるもの、少なくとも真理へと向かって進展しうるものを誰かがどうしてもはっきりと見いださねばなりません。そういう訳で私はこの事柄について彼と欲談しえないのを絶えず遺憾に思っています。というのも、もしも観察や予感の能力、そして極めて明晰でありうるということによって、かなりの程度までの現に所有する知識の肩代わりをなしうる人がいるとしたら、それは彼[ラザルス]です」²⁰⁾。続く二年間にわたって、手紙の上や直接の接触の頻度は減少した一わけても重要なのはラザルスの半年間のベルン滞在やそこで生じた多くの課題によって惹き起こされた一。ディルタイの手紙のなかにさえラザルスへの言及はほとんど見いだせない。

この一ただ空間的な距離からのみ惹き起された一疎遠は父親宛のディルタイの手紙(1865年6月はじめ)のなかにもその影を落している。そこでは彼は、彼の一曾ての一親密な友人ヴェーレンペニヒとラザルスの精神的成長について、どちらかという距離を置いた皮肉な遣り方で記述している。同時にディルタイは同じ手紙で、ラザルスのスイスでのキャリアーについてまったく好意的に次のように報告している。「ラザルスは社会的な本性のもち主で、非常に発展的なので、ベルンでは大学の主要人物ですし、スイス政府の主だった人々と関係を持っています。ほんとうにスイスにいる彼以外のドイツ人で、ここスイスをとりわけて冬のスイスを気に入っている人は他にいません(そのことをラザルスでなく、ウーゼナー Usener が言っています)。彼は再びベルンに戻りました。もしも歴史のなかに存在する理念 Idee について論文を書いたとするならば、その論文は、現在目ざましい成果をあげつつある諸学問にたざさわる人々を大いに取りあげるものです」(J, 200)。

ラザルスがベルンにおいて行った教授活動は、大いなる成果をあげ、彼は広範な知名度を獲得したにもかかわらず、1865年末に一すべての人の驚きになったのであるが一辞職願いを提出した。ベルンでの大学勤務からの解放は功を奏し、その結果彼の気を変えさせようとの試みは1866年4月1日には水泡に帰した。それについてディルタイは妹のマリーに宛て以下のように書いている(1866年1月22日付の書簡)。「年明け早々にラザルスがこちらに来ます。私がどんなにか手に入れたいと望んだかも知れない、ベルンでのラザルスいた地位は残念ながら空いたままです。人々は、彼が再度その地位に付く

と踏んでいます」(J, 207)と。

しかし、ベルン大学側のこの希望が充たされることはなかった。ラザルスはベルリンに留まり、1866年にボン大学に招聘されたマイヤー(Jürgen Bona Meyer)の後任として、1868年の聖ミカエル祝日(9月29日)に、ベルリンの陸軍大学(Kriegsakademie)での教授活動を開始した一彼にはいわゆるドイツの大学教授職は閉ざされていたからである一。1872年秋にラザルスは一その発言の影響多大のゆえ一活動を中断せねばならなかった。というのも彼の講演が、新たなカリキュラム担当官の命令にもとづき削除されたからであった。

ベルリン大学に正教授職を得たいとの彼の願いが果たされることはなかったのである。ところがラザルスは1873年5月に一まったくこの陸軍大学講師の職の喪失と引き換えとして一《正招摺教授 ordentlicher Honorarprofessor》を拝命した。ラザルスの講義は1873/74冬学期に開始され、1896年始めまで一中断を含みながら一ベルリン大学で行われた。1896年の復活祭に彼はベルリンを後にして、1897年秋にはかつての居住地であったメランへと移り住み、そこで1903年8月15日に一ほとんど忘れ去られて一死去したのである。

ディルタイとラザルスとは同じ時期一年ばかりの間一1866年4月から1867年当初まで一ベルリンで生活していたにもかかわらず、かつての交友関係や学問的・哲学的な思想の交換が再興したことを示すような証拠となる事実は全く存在していない。同じく1867年以来、比較的真っ当な書簡の交換があったという証拠も無いに等しい。もちろんディルタイとラザルスとの間に手紙による時々の接触があったことは当然推測しうるのであるが²¹⁾。

ディルタイとラザルス一派との、たとえ形は問わずとも、ある独特な共同研究あるいは学問的なコミュニケーションの最後の記録は、1877年に刊行されたグリム(Herman Grimm)の「ゲーテ論 Goethe-Buch」²²⁾について《民族心理学雑誌》第10巻(1878年)1号に「詩人の構想力 Die Einbildungskraft des Dichters」というタイトルのもと公刊されたディルタイの書評である。

この論文一この雑誌へのディルタイの唯一の寄稿であるが一は、後の論集『体験と創作 Das Erlebniss und die Dichtung』に入れられた彼の有名なゲーテ論文のオリジナルをなす最初の論稿である。

1882年以来ディルタイはベルリンで再度教鞭をとることになった。それゆえに場所的にはラザルスの近くに十年を越えて生活していたにもかかわらず、ディルタイ

とラザルスとが再び親密になるような機会は存在しなかったのである。

次第しだいに拡大し、後には相互の無視にまで至ったかつての親友同氏の疎隔の真の原因について憶測することは、現存する資料の状態を考慮するならば、控えられねばならない。勿論のこと、しばしば意識されず潜在するかあるいは公然と表明される反ユダヤ主義 (Antisemitismus) が、ディルタイに作用したなどということはない。ディルタイとラザルスとの間の数年にわたって存在する空間的な距離やたまたま性格上の明確な相違と並んで、とりわけ時の経過とともに顕在化して来た [両者の] 哲学するスタイルや方法上のそれぞれに特有の差異こそが [二人の間の] 疎縁をもたらした原因である。その後のラザルスの哲学は、《歴史的理性批判 Kritik der historischen Vernunft》というプログラムに取り組んだディルタイにとっては、その研究の進展にいかなる契機をも提供しなかった。他方で、大衆的で観念的な生の哲学のさらなる洗練に努め、生涯最後の数年間を専らユダヤ倫理学の完成にのみ身を捧げたラザルスの立場は、ディルタイの哲学上の研究とははっきりとした距離があるのである。

II

勿論のこと学理論についての考察は、ラザルスによって体系的な連関へともたらされなかったし完成もみなかったが、この学理論と並んで、まず第一にラザルスの《民族心理学》という新たな学問の考えを取り上げることにする。青年ディルタイは、自らが民族心理学に強烈に魅惑された事実を自覚していたのであり、これとの対決は避けられないと考えたのであった。

この民族心理学の構想はラザルスのオリジナルな業績である。ラザルスはその理念を、この新たな学問の基礎ないし基礎的諸問題に関する多種多様な論文のなかで表明し、自らの創始した学問の包括的な概要を描き出そうと試みたのである。これに比して、民族心理学の諸原理についてシュタインタールの書いた詳細な論文は、もしもラザルスとの共著として、しかも全くのところ彼の監督の下に起草された『民族心理学雑誌』第一号への序説論文と後の手稿を考えに入れなければ、存在しない。ましてシュタインタールの課題は、彼の研究分野である言語学のなかで民族心理学的に動機づけられた個別研究を営もうとすることにあった。

ラザルスは民族心理学の最初のプログラムの輪郭を、1851年にブルッツ (Robert Prutz) とヴォルフゾーン

(Wilhelm Wolfsohn) によって編集された雑誌『ドイツ博物館。文学、芸術、公的生活雑誌 Zeitschrift für Literatur, Kunst und öffentliches Leben, Deutsches Museum』誌上で公にされた「民族心理学の概念と可能性について Über den Begriff und die Möglichkeit einer Völkerpsychologie」という論文²³⁾において、既にきわめて早い時期に提起していた。

民族心理学の最初のオリジナルなプログラムの文書であるこの小論文で、ラザルスは、自身の民族心理学の確立へのその要求を、歴史学、民俗学そして法律学のごとき種々の精神科学に存在する《民族精神 Volksgeist》という概念の歴史の変遷を取り上げながら、まずは根拠づけを展開したのである。そのさいにラザルスが、この概念をかつ学問的に厳密に適用することに失敗したことは言うまでもないが、この考察から次のような結論を引き出した。つまり「もしも学問的なやり方で民族精神について語られうるべきならば、当然のこと、この概念自体がまずもって学問のなかに然るべき位置をもたねばならない。そこでは概念の内容、範囲そしてその意味が学問的な認識の形式をとって獲得され確定されるのである」。そしていかなる学問においてこのことが行われるべきかとの問いに、ラザルスは明確に「この位置は明らかに、「精神」が問題なのだから、精神の科学つまり心理学のなかに存在せねばならない」²⁴⁾と答えている。

しかし、同時代の心理学は、このテーマを自己の問題だと思っていない、とする批判的な見解—このことをラザルスは広範囲にわたって論証しているが—が生まれたがゆえに、そこから心理学的研究を、《民族精神》という概念でもって名称される現象領域に拡大適用する必然性が生じた。そこで、そのように拡大された心理学の課題は以下のようなものであった。「つまりは、民族精神の本質と振る舞いを心理学的に認識すること、民族的、精神的あるいは理念的活動が—生活、芸術そして学問において—それによって生起し、進展し、拡大し、昂揚し、衰弱する諸法則を発見すること、そして民族の固有性の成立とともに、その発展と最後には衰亡の理由や原因そして誘因を発見すること」²⁵⁾である。

歴史哲学—とりわけヘーゲルの—や人類学のなかに存在する促進剤や下準備を自家業籠中のものにしたある種の民族心理学が取り扱う素材は、社会的・歴史的世界に関する幾多の個別諸科学の研究のなかに既に存在している。この場合ラザルスの頭のなかでは、わけても歴史科学、民俗誌、民俗学そして特に言語学が考えられていたのである。

民族心理学が自らに対して設けた課題は一手短に言えば、多様な精神諸科学のなかですでに解明され、ラザルスがそれぞれ特殊な民族精神の発現として理解した諸民族の社会的・歴史的生活のこの事実を基にして、精神生活のこれらの諸現象の発展や連関の根底にある諸法則を発見するということであった。

そのさい民族心理学は、ラザルスが明白な反論に対して主張したように、民族精神の主体としての特別な《民族魂 Volksseele》の認識を目標にするものではない。社会的・歴史的生活のそうした実体化はラザルスとは無縁なものであった。ラザルスはヘルバルトとともに、心理学を心的な過程や進行の叙述として理解した。したがって心理学の課題は心(Seele)という実体やその質の認識にあるのではなくして、「(算術から詩作まで、感覚的欲望から倫理的欲求まで、事物の素材的な直観から美的直観までの)人間のあらゆる内的活動がそれに従って展開される諸法則の発見、そしてこの活動におけるあらゆる進歩や興隆の原因や条件を見いだすこと」²⁶⁾にある。というわけで心理学とは、心の活動とその諸法則を、心の本質や存在を主題とすることなしに、観察するところの精神学説(Geisteslehre)なのである。

この意味において民族心理学は《民族精神学説 Volksgeisteslehre》である。この学問の対象であり主題であるもの、つまりは民族精神とは一まずの概要が言われうるならば一民族を形成するすべての個々人の精神の集積以上のものであって、ラザルスがより正確な規定を為したように、「民族の紐帯、原理、理念であり民族の統一を形成するものである。ところでこの統一は、民族の精神生活の要素を共同社会的に産出し保持するさいの、民族の活動内容や活動形式(Inhalt und Form)、その方法の統一」である。そういうわけで民族精神とは、民族の個々人すべてに、「内的活動という点で共通すること、あるいは換言すれば、個々人すべてに共通な内的活動」²⁷⁾を概念的に確定した物言いである。

言語は、歴史学派の有機体論に依拠して規定された民族精神の本質的な要素の一つであるが、さらには「養育や服装に関する習俗や慣習、法や国家体制の保護、技術の訓練、手職の経営や学問の育成のような、ついには宗教にまで」²⁸⁾、その上に思惟の論理的な形さえもがその要素のひとつとして数え挙げられる。

民族精神の精神的・歴史的状态を構成するこれらすべては「民族精神の特種・多様な述語であるが、それにもかかわらず徹頭徹尾すべての個々人に《共通する gemeinsam》財」であって、個々人はそれに対して肯定的

に振る舞うか、さもなくば一ラザルスが明白に補足したように一否定的な態度を取るかになるであろう²⁹⁾。

ラザルスは計画草案の末尾において、例えば個人の全体への心的な関係といった、民族心理学の二三の特殊な研究対象についても素描している。この場合、ラザルスが民族心理学の本来の課題として規定するところは、個と社会的・歴史的世界との高度に輻輳したこうした相互作用関係の多様な諸法則を研究することであった³⁰⁾。さらには一ラザルスが付言するように一民族精神の客観的な諸関係、つまり民族精神の多様な諸要素間の繋がり(学問、芸術、宗教、習俗、法関係など)を諸々の特殊研究のなかで研究することであった³¹⁾。

民族心理学は、ラザルスによって、歴史の諸事実一この諸事実は本来的な意味において受け取られるが一をもとにして民族生活の心理学的諸法則を解き明かす学問として要請された一このように要約し規定することができる一。したがってそれは形而上学として批判された歴史哲学、とりわけヘーゲル流³²⁾のもの代替物となった。もしも歴史哲学から《歴史学的心理学》への転換を求めるラザルスの願望が成就されたならば、一ラザルスが言うように一そこでは「国民のあるいは人類の、真の、善き、つまり真に学問的な発展史を設立しよう」³³⁾という可能性さえも開かれることとなったに違いない。ラザルスが概要を思い描いた、社会的・歴史的现实の新たなこの総合科学は、明らかに、19世紀前半に多大の影響を及ぼした哲学的で学問的な多様な伝統に源を発しているのである。ここで個々の点を詳述することはできなくとも必ずや気が付くであろうが、ラザルスによって企図された民族心理学の中心には、ヘルバルト主義的心理学とヘーゲルの歴史哲学にロマン主義の民族精神論を繋ごうとする試みがあったことは疑問の余地がない。これ以上の詳細な概念史的・理論史的な研究は一そうすべきであろうが一、ラザルスの民族心理学のプログラムにおいて考察すべき、それぞれに異種の定理や哲学学説の統合の試みを一つ一つ追及せねばならない³⁴⁾。1851年のこの小論文がもととなって、新たな雑誌の創刊号にシュタインタールとの共著として執筆され、「民族心理学言語学雑誌への招待 Einladung zu einer Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft」としてプログラムの形で前置きされた³⁵⁾小論「民族心理学についての入門的考え Einleitenden Gedanken über Völkerpsychologie」が書かれたのである。そのなかでラザルスの初期の論文の大部分が文字どおり引用されているこのテキストの核心は、求められる新たな学問の本質、範囲、

構造そして課題領域に関して立ち入った規定を行うことにあった。

この論稿はその内実からして、その時々には詳述された説明やある種の補足を別にすれば、1851年の論文の域を越えていない。つまり民族心理学でもって民族の歴史的生のすべての領域を「精神の最も内的なものから説明し、それゆえ民族の心理学的な根底へと遡及する」³⁶⁾という考えが指導的役割を果たしている点では、依然と変わりがない。従って民族心理学が公に表明した根本目的からすれば、社会的・歴史的現実を、(ヘルバルト的)個人心理学の諸法則との類比において形成されている一般的で心理学的な諸法則を基に把握することが意図されていたのである。この研究は一換言すれば、独特なやり方で修正されたヘーゲルの形式によって「心理学的に理解された歴史」³⁷⁾を目指していたのである。

とりわけ、民族心理学の立場と機能を精神科学の伝統的な基準のなかで正確に基礎づけることは、1851年論文に継続する研究のうちの一つである。そのさい、ヘルバルトの心理学というと必ずや思い浮かばれる在来(個人)心理学に対して、民族心理学の関係を規定することには特別な意味があった。この文脈でラザルスとシュタインタールは民族心理学をして、個々の人間の心に向けられた伝統的心理学の不可欠な補足および拡張として規定した。つまり民族心理学には、個人心理学によってこれまで軽視されてきた人間の社会的側面を研究するという課題が割り当てられることになったのである。ヘルバルトに対しては彼が相応の結果を引き出さなかったことが非難されるのだが、ラザルスとシュタインタールはヘルバルトの折々の諸表現と結び付けて、人間を本来的に社会性によって規定されたものとして定義する。言い換えれば、人間は生まれながらに社会的存在(gesellschaftliches Wesen)であり精神創造的存在(geistschaffendes Wesen)である。つまり「心理学の教えるところは、人間は徹頭徹尾その本質からして社会的である。畢竟、人間は社会的生へと規定されている。なぜなら人間は同じ人間との関連のなかでのみ、人間が成らねばならないものに成りうるのであり、為さねばならないことを為しうるのである。人間の有り様、働き様がそれ自身の本質によって規定されているように、有りうるし働きうる。事実いかなる人間もまた、自らの内から純粋に成った永遠に変わらないものではなくして、人間がその内で生きる社会の特定の影響の下で[そうある存在である]。(...)精神は人間社会の社会的産物である。しかし精神を生み出すことは、人間の真の生活であり使命である。そ

れゆえ人間は社会的生へと定められており、そして個人は社会のなかで、種の生活に参画することによってのみ人間である」³⁸⁾ということになる。

こうして今や民族心理学は、人間の社会性(そして歴史性)というこの事実を勘案すべきであるという要請を考えに入れておかねばならなくなったのである。ラザルスやシュタインタールがあれこれと論じているように、確かに(ヘルバルトの心理学も含めて)これまでの心理学の一面性は補われねばならないが、それは言うまでもなく、「ある種の補足によって、つまり社会における人間の状態をある程度顧みることによって、補おうとする」³⁹⁾ことによってはならない。人間の社会性を方法的に正しく評価するためには、まったく別の掴まえ方がある。要するに「こうした補いは、一般的に言って、あらかじめ社会的存在として人間が、つまりは人間社会が、それゆえ個々の人間とはまったく別の客体が独特な研究の対象とされたとき初めて可能なのである」。従って以下のように考えるならば、そこから新たな研究対象の境界をどうしても設定せねばならなくなる。「なぜなら人間-社会(Verein)においては[それに]全く固有な心理学的な状態(Verhältnisse)、出来事(Ereignisse)そして創造(Schöpfungen)が出現する。それらは個としての人間にはまったく該当しないし、個としての人間から出発するものではない。それはもはや人間のなかの状態でも、人間の間の状態でもない。畢竟それは運命であって、人間は直接的にではなくて間接的に運命の支配下にあるのである。なぜならば人間は、運命を経験するところの全体に属しているからである。端的に言えば、問題なのは、それに属するすべての個々の精神とは違った、個々の精神を支配する集合体(Gesamtheit)の精神である」⁴⁰⁾。というわけで、この《集合精神 Gesammtgeist》ないし《民族精神》は創設すべき民族心理学の対象なのである。個人心理学—その正当性は否定されないが—が心的な個としての人間を研究するいっぽうで、民族心理学の研究関心は社会的人間すなわち人間社会へと向けられる。民族心理学とは民族精神についての科学なのであって、つまりは「民族の精神的な生の諸要素と諸法則についての学説」⁴¹⁾なのである。

しかしながら民族精神は、個々人から切り離された心的存在(Existenz)ではないのであり、民族精神は「まさに個々人の内にのみ生きる」のであり「特殊存在を導くものではない」のであるから、当然のこと民族精神のなかにさえ、個人心理学がより詳しく叙述するところの基本過程、つまり特殊存在におけると同様な基本過程が現

らわれ出ているにすぎない」⁴²⁾のである。

具体的に言えば、「抑制 (Hemmungen) と融合 (Verschmelzungen)、統覚 (Apperzeption) と圧縮 (Verdichtung) は民族心理学においてもまた問題なのである。ひとつの民族は、その創作 (Dichtung) のなかに民族の構想力 (Einbildungskraft) を有し、生活実践において民族の分別 (Verstand) や道徳 (Sittlichkeit) を示し、至るところ、わけても宗教のなかで民族の感情 (Gefühl) を表す」⁴³⁾。それゆえ—ラザルスやシュタイントールが再度はっきりと主張するように—民族精神のなかでは、個々人の心の中と同様の基本過程が「ただより複雑に、あるいはより拡大して」⁴⁴⁾進行しうるのである。従って—はっきりと書き留められるのだが—(ヘルバルトの) 個人心理学には「同時に民族心理学の基礎が含まれている」⁴⁵⁾。

正しく規定された民族心理学の主題は、言語、神話、著作、芸術、学問等のような「民族的生の知的側面」⁴⁶⁾と、さらには慣習、法、教育などにおいて客観化されたところの「民族精神の実践的生」ということになる⁴⁷⁾。

従って民族心理学は—ラザルスやシュタイントールの構想に従えば—社会的・歴史的生の全領域を包括する新たな科学として描き出されるのであり、この科学は当該のすべての個別諸科学の研究成果を十分に吸収して自らのために使用し、くわえてこれらの諸科学を《合理的に rational》基礎づけるという野心的な要求を惹き起こしたのであった。

引き続く二つの年 (1862年と1865年) にラザルスは、この多くの要求を含んだプログラムを明瞭にし説明しようという目的でもって、さらには民族心理学的な研究を適用するさいの糸口を導き出すことをねらった、部分的に大変に浩瀚である数篇の論文を公にした。そのさいに次の研究が重要である。つまり「慣習の起源 Über den Ursprung der Sitten」⁴⁸⁾、「思考の濃密化 Verdichtung des Denkens」⁴⁹⁾、「個人の全体への関係 Über das Verhältnis des Einzelnen zur Gesamtheit」⁵⁰⁾、「民族心理学についての二、三の統合的考え Einige synthetische Gedanken zur Völkerpsychologie」⁵¹⁾そして「歴史における理念について Über die Ideen in der Geschichte」⁵²⁾である。

そして1865年以後はラザルスは民族心理学へのいかなる寄与も果たしていない。ラザルスの民族心理学的に真に生産的であった研究段階は、彼のベルンでの教授活動の時期とほぼ符合するのである。雑誌での彼の最後の仕事—錯覚の学説についてに講演の完成—は、[雑誌の]

5年度 (1868年) 号に公表された。

遅くとも60年代半ば以降ラザルスは、雑誌の編集事務からますます手を引くようになり、今や編集の仕事はほとんど完全に、既に早くから編集事務の諸課題の主要な重責を担わなければならなかったシュタイントールに委ねられたのである。

なるほど1862—65年の五篇の論稿において、民族心理学的な諸端緒のさまざまな新側面が示され、新たな諸原理や諸概念が導入されたのだが⁵³⁾、しかしながらラザルスはこれらの諸要素を民族心理学というひとつの体系へと纏めあげることに成功しなかった。ディルタイでさえも言っているように、そして様々な場面で観察され書き記されているように、ラザルスには輻輳した事態を体系的に解き明かし叙述する能力がなかったのである。それゆえに、民族心理学の基礎や諸原理を体系的・連関的に仕上げることは明らかにラザルスにとって不可能なことであったのである。

結局のところ、繰り返しく新しく現れる多様な準備に終始するところとなった。このことから必然的に、民族心理学的なパラダイムを世間に広く認めさせることによって否定的な帰結がもたらされた。くわえて、完成された方法論も統一した用語使用も欠けていた。さらには、模範となる首尾一貫した遂行つまりプログラムの正に経験的な適用が欠けていることが分かる。冷静に観察するならば、ラザルスは綱領的なものに囚われたままでであると言わねばならないであろう。それにもかかわらず彼の計画には、様々な哲学的で学問的な文脈のなかでその効果と実り豊かさを発揮する諸々の刺激が充ちていたのである。

III

もしもラザルスとシュタイントールの二、三の著作についてのあまり重要でない、小さな紹介文を視野の外に置くならば⁵⁴⁾、ディルタイがラザルスとシュタイントールによる民族心理学の計画と体系的に対決したことなど一度たりとてなかったことは明らかである。それゆえ、ディルタイの初期の手記や日記のなかに民族心理学的な研究計画に対する暗示のごときものが存在したり、また直接の指摘が存在していたりすることを考えると、それだけいっそう私たちは不思議な気持ちになる。こうしてディルタイはある箇所、歴史を心理学的に説明しようという民族心理学の根本志向について省みながら「心理学的説明と何か。歴史的なものが世界情勢や支配的な理念からではなくして、心 (Gemüt) のなかの内的動機か

ら導き出されるならば、歴史的なものは心理学的に説明されるであろう。ということは、哲学的な思想が、現存する諸々の思想相互の諸関係からではなく、心の内的衝動から導出されると考えられるとすると、[同様に]形而上学や宗教も「心理学的に説明されることになるであろう」(XVIII, 204)と記している。

青年ディルタイは、歴史的生の諸法則を打ち立てるといふ民族心理学の指導的な理念と見解を共にしていると自覚していたが、このことは以下の章句の中に示されている。「今日の自然科学がまだ自然の記述であった頃と同じように、歴史はいまだ幼年時代にあること、それは私の夢であり続けるであろう。物理的な自然が運動の諸法則によって支配されているように、精神的な生もまたもちろん本来多様な運動の諸法則によって支配を受けているのである。それは歴史の具体的な諸段階のなかでは無限に絡み合っているので、最も簡単な形式へと還元することは決してできないであろう。しかしそれは物理的なものの内部の諸法則とは別のものでありえようか。企ては少なくともそこから開始されねばならないし、せめて世界を神話的、汎神論的生命化などといった思考の型、統一への努力という思考の型、彫塑的表象や音楽的な表象という思考の型などに従って探求されねばならない。くわえて、ある段階の内部では力強い始まりが、つまり言語学の発端があらかじめ作られている」(XVIII, 206; 参照 J, 81 以下)と言うのである。

しかし同時にこれらの(1860年以前の)初期の覚書においてさえ、社会的・歴史的発展をすべて心理学的に説明することにディルタイが疑義を抱いていたことが明瞭になる(参照 XVIII, 210)。

民族心理学の構想に対するディルタイの批判をより正確に示唆するもの、すなわち手紙の形で与えられた、そして上で引用した示唆を越え出るような示唆は、残念ながらこれらのアフォリズム的な文書には見当たらない。ディルタイが民族心理学をいかに評価したのかに関する詳細な解明は、疑いもなく、新雑誌の創刊号の中の既に言及されたディルタイの書評に期待せねばならなかったであろう。ところが、月刊ヴェスターマン画報(Westermanns Monatsheften)誌上で公表を予定していたこの論評は、現存する資料状況からしてははっきりしない理由から、ディルタイによって公やけにされることはなかった。この論評は、今日に至るまでディルタイの遺稿中には発見されていないので、この書評のテキストは既に失われたのだという事実から始められねばならない。勿論のこと、ディルタイの批判の方向についてのあ

る種の示唆は、ラザルス宛のシュタインタールの手紙(1860年10月1日付け)からくみ取られうる。そのなかでシュタインタールが書き記すところによれば、「先日ディルタイが私たちの雑誌について私に何かを言っていました、それは部分的には理解されていないことに、またある部分は悪意ある誤解に依っているのです。望むべくは、そうした見解が広がらないことです。もしも雑誌が一般的に哲学史にとってプラスであるならば、私たちは雑誌に関して、ディルタイが考えるのと同じように、全く別の成果を挙げたいものです。そうしたら私たちは重要な歴史家に寄稿を御願ひできます。私たちの創刊号を通じて、ゲルヴィーヌス(Gervinus)のように、この雑誌が哲学の歴史にとって偉大な業績を果たしたと感じた人々は反発や恥辱を感じたに違いありません。こうした人たちの業績すべては無のものであり、予備作業、素材なのだということを明らかにしたのです。つまり、[この雑誌は]もっと正当に扱われねばならないのです。この分野では何もなされていないのですから、私たちこそマイスターの役割を演じたのです。連中たちは、私たちの呼びかけに決して関与しえなんでしょう。というのも、そうすることによって彼らに呼びかけることは彼らの業績を非本質的なものとして価値を貶めることになるからです。誰もそのようなことを求めはしません。なぜなら各人は、私たちが実際に何を為しえたのかと、静観する立場を取るからです。そしてシュタインタールは、さらに啓発的な補足を付け加え、「そうした歴史哲学的な説明が主要事であり事柄すべてなのだ、とディルタイは思いました。私たちが付け加えた心理学的諸法則は全くどうでも良いのでしょうか」という。ディルタイとの会話についてのこの報告が契機となって、引き続きシュタインタールは次に以下のような諦めに似た注釈を書いている。「それでもって実際まさに事柄は終了しました。私が危惧するのは、多くの人々がディルタイのように考えることです。私たちの企ては10年から15年早く開始されてしまったのです」と⁵⁹⁾。

それにもかかわらず、ディルタイの批判的な論評がシュタインタールに対してその影響を失わなかったことは、二週間後に書き記された、この場合もラザルスに宛てた一通の手紙のなかで明らかである。「雑誌の創刊号はいまや最終的に完成しました。それは今週のうちに発行されます。(…)説明のためのカタログもまた新たに刊行されます。私はそれを変更しました。まず始めに一民族心理学の課題[を説明した]—序説を、あなたがそれを書いたように[書き改めました]。しかし個々の標題につ

いては、以下のすべてをそのまましておきました。そしてディルタイとの話し合いから惹き起された事柄については一言申し述べておきました⁵⁶⁾と記している。もちろんシュタインタールはディルタイから影響を受けたこの修正の一つ一つを詳細に報告した訳ではなかったのである。

民族心理学の構想と学理論に関するラザルスとの会話を通じて刺激されて、ディルタイは、続く年に《心理学的に捉えられる歴史》という考えに対する自らの《多様で学問的な省察》に体系的形態を与えようと試みた。というわけでディルタイは1860年の終わり以来—シュライエルマッハーの書簡に関する仕事や中世哲学の研究と並んで—論理学と学理論の諸問題に集中的に取り組んだのであり(参照 J, 156 と 158), そして学理論の歴史と体系の根本特徴(参照 J, 178 と 179)の輪郭を描くに至ったのである(1862年11月)。ディルタイは突然の病魔に襲われ、その中世研究を中止するはめになり、しばらくの間、学問のとりわけ精神科学の基礎に関するこの体系的な取り組みを中断したのであった。そして博士学位取得(Promotion, 1864年1月)と教授資格取得(Habilitation, 1864年6月)の後、ようようしてディルタイは再びこの問題と向き合うことになったのであった。彼は私講師としての講義活動を、1863/65年の冬学期に、シュライエルマッハーについての講義と「個別諸科学の歴史と方法を特別に顧慮した、論理学 Logik, mit besonderer Berücksichtigung der Geschichte und Methode der einzelnen Wissenschaften」という講義でもって開始した。この論理学講義をディルタイは次の学期も私的講義(Privat-Kolleg)として繰り返し、そのために1ボーゲンの分量をもつ綱要、つまり『哲学的学問の論理と体系の綱要 Grundriß der Logik und des Systems der philosophischen Wissenschaften』⁵⁷⁾を印刷に付したのであった。

この綱要には、ディルタイの後の研究計画である《歴史的理性批判 Kritik der historischen Vernunft》の萌芽を見て取ることができるが、そこから—ディルタイの体系的な省察についての当時の立場を一瞥しようと—toもに—民族心理学に対するディルタイの評価への示唆が汲み取れる。さらにそれ以上に、民族心理学やその他の同様な目論みに対し、ディルタイがそれとは別の計画を提起するつもりであったことがはっきりとする。

綱要の基礎をなす第一部は『学問的認識、その形態と方法の論理ないし理論 Logik oder Theorie der wissenschaftlichen Erkenntnis, ihrer Formen und ihrer Me-

thode』という標題が付けられている。認識論、論理学、一般的方法論について大変詳細に素描されたこの叙述に続いて、中核部分として諸学問の体系が論じられている。ディルタイはこの体系を、1.《外的世界についての諸科学》2.《精神の諸科学》3.《形而上学と哲学的神学》の三つの部分に区分けしており、ここでの文脈において興味ある、精神科学を取り扱った第2部は四つの主要な章からなっていて、それぞれサブタイトルが付してある。第1章の主題は《精神の基礎的で一般的な科学; 心理学と人間学》。それに続いて[第2章]《精神の現実(real)科学、これによって今や精神の内容が認識可能となる》。この《精神の現実科学》は、1. 倫理学 2. 法哲学と国家哲学 3. 宗教哲学そして 4. 美学である。次の章[第3章]の標題は、《歴史の哲学、ないしは歴史の諸現象の経過を演繹的方法を適応することで、その根底から説明すること》⁵⁸⁾となっている。

《歴史の哲学》というこの表記の下にディルタイは三つの類型を編成し、それに見出し語を付けて特徴づけている。そのなかで最初のもは、《必然的に結び付けられた理念の弁証法としての歴史; 例えばヘーゲル》である。次に《厳密科学としての歴史、これは人間の諸状態の共存や継起(進歩)の同形性(法則)を発見する; 例えばコント、ミル、バックル》。そして最後が《歴史の説明根拠をその内に含む基礎科学としての心理学に基づいた歴史; 例えば民族心理学、ラザルス、シュタインタール》である⁵⁹⁾。

歴史発展の総体的過程のまさにある一つの要因を絶対化する歴史哲学的な思考の、その三つの現象形態に対してディルタイは、以下の節で異議を唱えている。ディルタイが言うような《精神の研究すべての連関》だけが、歴史の哲学にとって《実り豊かな方法》を可能にするのである⁶⁰⁾。

歴史哲学一般に、とりわけ民族心理学に対するこれ以上の批判は、綱要というものの概観的な性格からして、展開されることはなかった。

民族心理学や実証主義との対決がその後においても彼の仕事の中心に位置していることは、両親に宛た彼の手紙(1866年7月付け)から推測されうる報告が示唆している。そこでは「この数週間では私はラザルス主義、ミル主義に反対する(contra Lazarus et Lazaristas, Millium etc.)小冊子の詳細な企画を立案しました。それは、人間と歴史の研究についてということになるでしょう」(J, 218; 参照 J, 227 と 230)と書いている。

この手紙のなかで言及され、二、三のスケッチや断章

が今日まで伝えられているこの計画から、『序説 Einleitung』の最も重要な前段階をなす大部の『1875年論文 Abhandlung von 1875』までは直結している。ディルタイが、民族心理学や実証主義との対決を通じて一同程度に重要なヘーゲル批判は欠けているが、歴史的認識についての自己の方法論の開陳へと至らざるを得なかった様子が、ここから明らかとなる。

人間と歴史の研究に関する研究の断章や草案は、ここでの文脈からすれば、二つの観点で重要である。ひとつはヘルバルト的なものに起源を有する旧来の説明心理学に対立する議論を断章や草案のなかに取り入れたこと、その一方でディルタイはそこにおいて、社会的・歴史的現実の認識について自分自身の方法の輪郭を素描したことである。こうしてディルタイは、「心理学は全体として説明科学としては不可能である、なぜなら説明的科学は諸仮説の集積を伴わねばならないからである」(XVIII, 3)とまずは断言する。加えて、歴史の有する複雑さは、その総体的連関を厳密に説明しようとするとき障害になる。従ってこうしたことを要求する歴史哲学は不可能な事柄である。つまり「そのように形成された[社会と歴史の]全体(das Ganze)は、自然の全体が例えば物理学などによって説明されるようには説明されえない。そこで私は、自然においてはいったい何が説明されているのか、という問いをたてよう。そこでは諸要素と諸力の作用の在り方が認識されるのであって、一度たりとも錯綜した事態が認識されたことなどない。従って自然の継起する事態の部分部分の内容は、作用の在り方を介して説明されるのである。歴史もまた全体としては説明されない。そしてこの点で最も明瞭に示されることは、歴史の哲学すなわちこの全体を認識の対象にする科学はひとつの幻想である、ということである」(XVIII, 15)。

こうした問題の状態に直面してディルタイは、「人間の研究を社会の研究と結び付けることに」根ざした、社会的・歴史的現実のひとつの認識方法が絶対に必要であると主張した(XVIII, 3)。それゆえに、心理学的・人間学的研究と社会的・歴史的な研究との接続を求めこの要求が最初に向けられた先は、自然科学的な方法理想に導かれ短略化された心理学の構想から帰結する非歴史的で心理学主義的な還元であったのである(参照XVIII, 16)。

このドグマ的に固定化された説明心理学に対してディルタイは、帰納的で《経験主義的な》⁶¹⁾ 心理学的研究を要求する。この心理学は、心的事実を、《偏見を交えることなく、しかも入念に》研究するのであり、つまり《こ

こ[心的事実]において生起する連関に関するいかなる先行的な仮定も排除して》研究するのである(XVIII, 16)。

従って、ディルタイが要求した説明的でない新たな心理学は、本質的に三つの原理に基づいている。すなわち、

1. 心理学的諸法則からの演繹を基にした、心的諸連関の説明を放棄すること。
2. 主知主義的に還元された心理学(《表象力学 Vorstellungsmechanik》)を、心的生の全体性(Totalität des Seelenlebens)を顧慮することによって克服すること。
3. 心理学的・人間学的分析と歴史的分析とを連携させることで、抽象的な個の心理学に導かれた、結局のところ非歴史的(原子論的)心理学研究からの転換を実行すること。

ディルタイのこうした省察は、時期的には1871年以降と確定することができる予備研究のなかで遂行されてきたのであり、それは1875年に『人間、社会そして国家に関する諸科学の歴史の研究について Über das Studium der Geschichte der Wissenschaften vom Menschen, der Gesellschaft und dem Staat』として公刊されることとなったのである。

この論稿のために、ディルタイが、精神諸科学の理論史についての一連の研究への体系的な序説の前半部として構想した予備研究から判明するのは、ディルタイの一連の研究の最終的な目的が、「知的現象を取り扱う、どちらかと言えば変則的方法」を考えることであつたに違いないということである(XVIII, 38)。そこで意図されていたのは、この方法の諸原理を、「相い似てはいるけれども、コントやバックル、ゲルヴィーヌスそしていわゆる民族心理学のそれとは徹頭徹尾違った方途を取って」説き明かすことであつた(XVIII, 39)。

意図された通りの達成がなされてはいないが、遺稿として残された予備研究の断章からは、ディルタイが引用した諸立場から彼自身どこで決定的に相異しているのかが明らかになる。実証主義者や民族心理学者は結局のところ《演繹的研究者》であり、《旧来の歴史の哲学と今なお徹底して手を切っていないのである》(XVIII, 39)。ディルタイは社会的・歴史的世界の全景を手に入れるという試みを退け、イギリス人やフランス人の中で流布されていた《科学に関する性急な「創造 Schöpfungen」への傾向》を批判する。これらの傾向ははその実質内容からすれば、心理学と歴史学によって開示された、歴史や社会の基礎的諸関係のなかの個々の要素を、《性急な建

築物 rasches Bau』を構築するために利用する以外の何物でもない—そうディルタイは批判する—(XVIII, 47)。「法則性をもった極めて特種な事態を演繹的に導出し、ついには諸現象を説明しうる」ような基礎科学としての心理学を要求する可能性に、ディルタイは、心理学研究の現在のレベルに照らし合わせて、結果として異議を呈するのである(XVIII, 50)。こうした評価を受けるものには、アダム・スミスやミルの試みばかりでなく、ヘルバルトのやり方(Ansatz)も、さらには民族心理学の計画も含まれた。こうしてディルタイは次のような結論に到達する。要するに「心理学的な認識を演繹的に使用すること、それは個人の行為する生をその全範囲にわたって説明したりなどは決してしないのであるが、社会や歴史の興味深い多くの現象に一条の光明を投じることになるであろう。心理学的認識の演繹的使用は、機知に富んだ論及や啓蒙的な討議を可能にするであろう。しかし、歴史を形作る諸々の出来事の何かある部分を説明するための方法上の手段としては、それは充分でないばかりか、まさに有害であり混乱を招くものである。なぜならそうした諸々の出来事のいかなる部分においても、私たちの行為の法則的な全連関が働いているからである。こうして説明は、これまで確定されていない諸法則の認識を要求するであろう諸構成要素をまさに求めるがあまり、必然的に出来事のもつ豊かさを削減してしまう」(XVIII, 51)のである。

注目に値するある欄外の注記のなかでディルタイは、社会的・歴史的世界の一面的で心理学主義的な把握への批判の矛先を直接には民族心理学に向けている。「民族心理学は科学であることを主張する。もしもそれが数学のように理念型を展開するものでないならば、そのような科学は一群の事実を説明せねばならない。[科学をして事実の説明と]考えるのは、なにがしかそうした一群の事実を、立ち戻るべき指導的体系として心理学的諸関係へと還元しうるはずだ、ということをも前提にしているからにちがいない。このことは全く事実と反する。慣習や言語は大凡こうした事実に近いが、しかし別の根源的な諸体系にも依存している。そこから結果として、心理学的な根本状態はどこでも素材を形成するのである云々といったこと、心理学なしには何も理解されないが、心理学によって何かあることが理解されるのでもない、ということが導き出される」⁶²⁾のである。

ディルタイはこのディレンマからの抜け道を、現在の心理学よりも「より広汎な基盤を有する」人間学の設立に見るのであった(XVIII, 54)。ディルタイが1865年の

『ノヴァーリス論文 Novalis-Aufsatz』のなかで既に、《現実的(実相)心理学 Realpsychologie》として特徴づけた⁶³⁾この心理学的・人間学的な基礎科学は—ディルタイが綱領的に公式化したように—「決して個々の人間を抽象化するのではなく、そうではなくして外的世界や社会との相互作用のなかに生きる個から出発し、人間についての真理、つまり機微を捉えた人間理解や倫理的な研究へと繋がる真理にまで至るはずのもの」(XVIII, 54)であった。

この《現実的心理学》の完成をめぐる70年代中頃より始まった様々な努力については、ここではこれ以上追及しないことにしたい。この構想が民族心理学のプログラムに対する対抗的企てとしてさえ考えられていたことが、依然としてはっきりと確認されるのである。既に考察してきたように、もともとの計画では、人間と社会の研究に関するディルタイの研究はミルや民族心理学への批判として設けられるはずのものであったが、それに反して『1875年論文 Abhandlung von 1875』の中には民族心理学への明白な示唆は全く見い出せない。今やディルタイの批判的な議論は、専らコントの実証主義とミルの経験主義にだけ向けられている。しかしながら、《民族魂》や《民族精神》そして《民族や国家という有機体》(V, 62)といった概念の適用に対して注記のなかで展開されている批判は、民族心理学への隠された示唆として読むことができるのである。これとそっくりの批判が『序説 Einleitung』のなかにも見い出せる(I, 31)。ディルタイの主要著作には、復元された第二巻の体系的な部分を含めて、民族心理学との対決やさらなる示唆は全く収められていない。ほんの僅かばかりの暫時的なコメントを度外視するならば、ディルタイの後期の仕事においてさえ、民族心理学という主題への言及はない。このことから推測しうることは、70年代半ば以降ディルタイは、民族心理学の諸原理に対するそれ以上の継続した根本的な対決に、いかなる体系的な方向をとった関心をも最早有しなかったということである。今や実証主義との論争が、明白に前景へと現れたのである。

最後に、ノール(Nohl, H.)学徒であったフランケンベルガー(Julius Frankenberger)によって初めて論及された注目すべき事実を指摘するにとどめたい—そのための説明を提起しようとは思っていない—。それは、ディルタイはその後期の著作において展開した客観的精神(objektiver Geist)という概念をなるほどヘーゲル哲学から援用して来たのであるが、しかしラザルスのことには一言も立ち入って触れていない、という事実である。

それゆえ、このことは驚くべきことである。なぜならば一既に言及したようにラザルスは60年代中頃、従ってディルタイよりも40年以上も前に、ディルタイの志向と同じく、客観的精神の思弁的でなく経験的な概念を基礎とするところの、客観的精神に関する精密な理論の大筋を素描していたからである⁶⁴⁾。

注

- 1) W. Dilthey: Einleitung in die Geisteswissenschaften. Versuch einer Grundlegung für das Studium der Gesellschaft und Geschichte, in Gesammelte Schriften Band I.
- 2) Einleitungの前史については、H. Johach/F. Rodi: Ges. Sch. XIXの編者前書きを参照。
- 3) K. Gründer: Zur Philosophie des Grafen Paul Yorck von Wartenburg. Aspekte und neue Quellen. Göttingen 1970, 262f. を参照。
- 4) Einleitungの計画の形成史の復元を私は自身の博士論文: Die Idee einer Kritik der historischen Vernunft. Wilhelm Dilthey's erkenntnistheoretisch-logisch-methodologische Grundlegung der Geisteswissenschaften. Freiburg/München 1984 で試みた。
- 5) これについてはE. Rothacker: Einleitung in die Geisteswissenschaften. Tübingen 1920 と M. Riedel: Verstehen oder Erklären? Zur Theorie und Geschichte der hermeneutischen Wissenschaften. Stuttgart 1978.
- 6) しかし H. Johach: Handelnder Mensch und objektiver Geist. Zur Theorie der Geistes- und Sozialwissenschaften bei Wilhelm Dilthey. Meisenheim am Glan 1974, 特に30 f. 参照。
- 7) Der junge Dilthey. Ein Lebensbild in Briefen und Tagebüchern 1852-1870. Zusammengefasst von C. Misch geb. Dilthey. Leipzig 1933, Stuttgart 第2版 1960 (以下引用は: J.)。
- 8) Briefe Wilhelm Dilthey's an Bernhard und Luise Scholz 1859-1864. Mitgeteilt von S. v. d. Schulenburg. Berlin 1933 (以下引用は: Scholz-Briefe)
- 9) M. Lazarus: Lebenserinnerungen. Bearbeitet von N. Lazarus und A. Leicht. Berlin 1906; N. Lazarus: Ein deutscher Professor in der Schweiz. Nach Briefen und Dokumenten im Nachlaß ihres Gatten. Berlin 1910; M. Lazarus: Aus meiner Jugend. Autobiographie. Mit Vorwort und Anhang herausgegeben von N. Lazarus. Frankfurt a. M. 1913.
- 10) Jugendfreundschaft Teichmüllers und Dilthey's. Briefe und Tagebücher, を見よ。Archiv für spiritualistische Philosophie und Geschichte I (1939) 所収, 前掲書 314 を参照。
- 11) J, 26. さらに J, 58 f. として Lazarus: Lebenserinnerungen, 前掲書 314 を参照。
- 12) 例えば G. Scholem: Juden und Deutsche, 同左: Judaica II. Frankfurt a. M. 1970 所収, 32 参照。
- 13) 伝記については特に以下を参照。A. Leicht: Lazarus der Begründer der Völkerpsychologie. Leipzig 1904; L. Stein: Lazarus, Moritz. Biographisches Jahrbuch und deutscher Nekrolog. VIII. Band. Berlin 1905, 124-134 所収; I. Belke: Einleitung zu: Moritz Lazarus und Heymann Steinthal. Die Begründer der Völkerpsychologie in ihren Briefen. Herausgegeben von I. Belke.

Tübingen 1971. ここにはラザルスとディルタイとの関係について、民族心理学の影響史についての重要な示唆も見い出せる。

- 14) ラザルスに関するほぼ完全な文献目録は、前掲書 I. Belke (Hrsg.): Lazarus und Steinthal, の 394-399 頁にある。
- 15) 第二版は 1876 年から 1882 年にかけて 3 巻本として刊行された。第三版は 1883 年から 1897 年に。
- 16) 民族心理学のための雑誌を編纂することが、シュタインタールの初期の考えにまで逆上することは、1852 年 4 月 6 日付のラザルス宛の手紙から汲み取れる。Lazarus-Steinthalbriefe, 255.
- 17) J, 101; さらに Scholz-Briefe, 29.
- 18) J, 101; Scholz-Briefe, 31.
- 19) 1860 年から 1862 年までラザルスは招聴教授であり、1862/63 年冬学期からは [ベルン大学の] 哲学と民族心理学の正教授につく。1862 年から 1866 年までの間ラザルスはベルン大学の哲学部の学部長であり、1864 年にはくわえて学長を務める。
- 20) Scholz-Briefe, 38. また J, 136. を参照。
- 21) 1876 年のラザルス宛のディルタイの一通の手紙は, A. Leicht: Lazarus. Gedenkschrift zum 100. Geburtstag des Begründers der Völkerpsychologie. Frankfurt a. M. 1924, 35. から引用。
- 22) W. Dilthey: Die Einbildungskraft des Dichter, Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft (ZfV) 10 (1878), 42-104.
- 23) M. Lazarus: Über den Begriff und die Möglichkeit einer Völkerpsychologie, Deutsches Museum I (1851), 112-126 所収。
- 24) 同上 112.
- 25) 同上 112 f.
- 26) 同上 117.
- 27) 同上 118.
- 28) 同上 119.
- 29) 同上。
- 30) 同上 119 ff. 参照。
- 31) 同上 123 f. 参照。
- 32) 同上 113 参照。
- 33) 同上 126 参照。
- 34) 民族心理学の科学史については, C. Sganzini: Die Fortschritte der Völkerpsychologie von Lazarus bis Wundt. Bern 1913, 5-29; E. Hurwicz: Die Seelen der Völker. Ihre Eigenarten und Bedeutung im Völkerleben. Idee zu einer Völkerpsychologie. Gotha 1920, I f; I. Belke: Einleitung, 前掲書 XLIII ff.
- 35) M. Lazarus/Steinthal: Einleitende Gedanken über Völkerpsychologie als Einladung zu einer Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft, Z f V I (1860), 1-73 所収。
- 36) 同上 1.
- 37) 同上 21.
- 38) 同上 3.
- 39) 同上 5.
- 40) 同上。
- 41) 同上 7.
- 42) 同上 10 f.
- 43) 同上 11.
- 44) 同上。
- 45) 同上。
- 46) 同上 40 ff.
- 47) 同上 55 ff.
- 48) Z f V I (1860), 437-477 所収。

- 49) Z f V 2 (1862), 54-62 所収。
- 50) Z f V 2 (1862), 393-453 所収。
- 51) Z f V 3 (1865), 1-94 所収。
- 52) Z f V 3 (1865), 385-486 所収。
- 53) ラザルスは『民族心理学についての二、三の統合的考え Einige synthetische Gedanken zur Völkerpsychologie』という論稿において、ヘーゲルとは一線を画しつつ、客観的精神という概念を展開し、客観的精神の理論の輪郭を素描している。これについては、J. Frankenberg: Objektiver Geist und Völkerpsychologen, Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik 154 (1914) 68-83 と 151-168 所収ならびに M. Landmann: Der Mensch als Schöpfer und Geschöpf der Kultur. Geschichts- und Sozialanthropologie. München/Basel 1961, 33 ff. を参照。
- 54) これらの諸々の短い書評の一覧は、ディルタイによって『月刊ヴェスターマン画報 Westermanns Monatsheften』において論評された著作についての文献目録のなかに見い出せる。XVIII, 471-520.
- 55) Lazarus-Steinthal-Briefe, S. 318 f.
- 56) 同上 S. 319.
- 57) W. Dilthey: Grundriß der Logik und des Systems der philosophischen Wissenschaften. (講義用に作成) Berlin 1865.
- 58) 同上 14.
- 59) 同上。
- 60) 同上 15.
- 61) XVIII, 5: 経験主義とは「心的内容の起源を純粹経験 (pure Erfahrung) に由来するとする仮定ではない」; それ [経験主義] は、仮定ではなくて、むしろ説明するという欺瞞的な意図なしに規則や構成諸要を確定することである。
- 62) XVIII, 224; XVIII, 88 を参照。彼の教授資格取得論文『道徳意識の分析の試み Versuch einer Analyse des moralischen Bewußtseins』において、ディルタイは次のように記している。「心理学の法則は純粹な形式的法則である。それは、人間精神の内容に関係するのではなくて、形式的な振舞や行動と係わるのである。それはいわば、詩のひとつひとつの言葉、文法そして韻律であって、ここでは人間の心はそのようなものとして考えられるであろう。というわけで現代の民族心理学派の誤りは、民族心理学派が歴史を、従ってこれまでの人間存在の集積を心理学から、だから私たちの精神的生がそこにおいて経過する諸形式 (Formen) の科学から説明しようと企てることにある。」VI 43. それはそうとこのことは、ディルタイによって、その倫理学講義において文字通り繰り返されている。X, 111f を参照。
- 63) W. Dilthey: Novalis, Preußische Jahrbücher 15 (1865), 622 f 所収。
- 64) ここでの研究が終了した後に、エルサレムのラザルス文庫 (Jüdische National- und Universitätsbibliothek) にディルタイとラザルスとの関係に関する資料があることを発見した。この資料は後の研究の際に利用することになるはずである。部分的には公刊された I. Belke 編「ラザルス/シュタインタール 書簡集」第二巻の 2 などのなかに、青年ディルタイのこれまでに未だ知られていない二、三の書簡が含まれている。しかし同様にこの研究ではまだ使用することができなかった。